本会元理事長　藤縄謙三先生を偲ぶ

本会元理事長の藤縄謙三先生は、二〇〇〇年一〇月四日、呼吸不全のため京都市西京区の病院で逝去された。享年七〇歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は、一九二九年一二月一五日、新潟県にお生まれになり、旧制新潟高校から、新制大学第一期生として京都大学文学部に入学された。一九五三年に史学科西洋史学専攻を卒業、ひきつづき大学院に進まれ、一九五五年九月、博士課程を中退して大阪府立大学教育学部助手となられた。そののち同大学教養部講師、助教授をへて、一九七〇年四月、京都大学文学部助教授に就任、一九七九年一二月、教授に昇任して西洋史学第一講座を担当された。一九九三年、停年退官して名誉教授の称号を受けられ、ただちに京都女子大学文学部に迎えられて、教学に力をつくされた。

ご専門は古代ギリシア史で、とりわけ文化史の領域では、余人の追随をゆるさぬ独自の境地をひらかれた。古典に沈潜してえられた深い造詣と、独創的な解釈があいまって、ギリシア人の思想と文化に新たな光をあてる著作が、つぎつぎと生みだされた。

最初の著作『ホメロスの世界』は、三六歳のときのお仕事だが、叙事詩の世界に登場する英雄や人間の心の内面を現代によみがえらせた清新なホメロス論として、多くの人に衝撃をあたえた。つづく『ギリシア神話の世界観』は、博捜された古典の引用を叙述のあいだに織り込んでいくユニークなスタイルを打ちたてつつ、ギリシア神話の独自性と普遍性を自在に論じて高い評価を受け、『ギリシア文化と日本文化――神話・歴史・風土――』は、同じようなスタイルによりながら両文化の特質を論じ、新しい比較文化論あるいはすぐれた日本文化論として、驚嘆の念をもって迎えられた。さらに『歴史学の起源――ギリシア人と歴史――』は、ひろくギリシア人の歴史意識・歴史観に目配りしながら、その偉大な遺産について語り、『ギリシア文化の創造者たち――社会史

的考察――』は、古代ギリシア史における「社会史」の豊かな可能性を示証して、いずれも最高の達成との賛辞をあつめた。そして、畢生の大著『歴史の父ヘロドトス』は、奔放で錯綜した『歴史』の内容を、系統だてて整理しなおすとともに、理解に資する多面的な情報を吟味・提供し、ヘロドトスの豊穣な世界に親しむための絶好の書として、江湖に歓迎された。

これらの著作は、どれも一読して先生のものとわかる個性的な、しかし、きわめて平明な文章でつづられた。先生の著作のように、高度の専門性をそなえながら、一般の読者にも歓迎され、ひろく読まれた例は稀であろう。

先生のお仕事の魅力は、みずみずしい文学的感性と、博識に裏づけられた鋭い洞察にあったといえよう。細かな問題について丹念に検討を重ねていくというよりも、直観的に、じかに本質をつかみとってみせるあざやかさが印象的であった。これは文化史の本領であろう。ただ、このようないいかたから、先生が実証を簡略にされたように受けとるむきがあるなら、それは誤解である。先生は、テクストの読みにはきわめてきびしかったし、安易な結論をみちびくものには、はっきりと拒絶の姿勢をしめされた。堅実一筋の実証に満足せず、直観によってそれを超えようとされた、というべきかもしれない。しかも、論じられるところは、いつでもことの本質にかかわり、新鮮な指摘に満ち、圧倒的な博識に立脚して説得力があったから、読むものはみな引きこまれた。

「古典的詩文を通じて、古代ギリシアの歴史や人間と対話することは、……私にとって無上の喜びであった。」とは先生自身のことばだが、じっさい、先生は古典を読むことを愛された。

ある小さな会合での雑談のおり、先生は、むずかしい問題があって会議が長びき、遅くに疲れきって帰宅したようなときには、深夜にギリシア古典のテクストを読むのだ、と話されたことがある。そのようなときでも勉強を？　と驚きの声があがると、神経がささくれだって眠れそうもないとき、古典を読むと気持ちが落ち着くし、お酒がのめない自分にはそうするしかないのだと、いつものはにかんだような表情で答えられた。

最後の大きなお仕事は、トゥキュディデス『歴史』の翻訳であった。先生はこれに心をこめられた。「トゥキュディデスを訳すというと、すぐ、文章がむずかしいという話になりがちで、それはたしかにそうなんだけど、しかし、あれはとにかく読んでおもしろい本ですよ。こんど訳してみて、あらためてそう思った。」といわれたことが思い起こされる。半分を訳了されたままで逝かれたことは、惜しんでもあまりあることといわなければならない。

（大戸千之）